

# “王国”との絆 未来開く

かつて全国のサッカー少年少女が憧れた聖地のピッチから、「希望の土煙」が上がっていた。福島県の楡葉町と広野町にまたがるサッカー施設「Jヴィレッジ」は福島第1原発事故後、東京電力の対応拠点になった。芝生はまたたく荒涼とした風景に変わりはなかったが、防護服の作業員や重機などの姿は消え、2020年の東京五輪前の全面再開に向けた復旧工事が始まっている。

「白黒だった視界が少しだけカラーになった」。同施設を運営する日本フットボールヴィレッジの小野俊介統括部長(59)は、壊れたピッチ地下の配水管を取り換える作業を見守りながら、事故後の苦難の日々を振り返った。4月からは芝生を植え始める予定で、小野統括部長は「世界最高の天然芝」をよみがえらせたい」と意気込む。

ただ、聖地が輝きを取り戻すには、施設の復旧整備とともに、風評被害の壁を打ち破る必要がある。福島第1原発からの距離は約20キロ。事故後に設置した40カ所の放射線監視装置(モニタリングポスト)の測定結果に問題はないが、「今で

も県外から『福島でサッカーして大丈夫か』という反応があるのは残念」と小野統括部長はため息をつく。Jヴィレッジ再開を待ち望むサッカー関係者は、本県にもいる。全寮制で中高生のサッカーエリートを育成する日本サッカー協会

(JFA)アカデミー福島は、原発事故後、御殿場市に一時移転した。特例で受け入れ環境を整えた本県関係者に対し、中田康人男子チーフコーチ(55)は「福島から避難した直後から、よそ者扱いをされたことはない。サッカー王国の人情の深さを実感した。本当にありがたかった」と感謝する。

同アカデミーは「福島」の名前を守り、将来的に活動拠点をJヴィレッジに戻す方針。「私は選手たちの親代わり」という中田チーフコーチは、住民の帰還が進み、生活環境が元通りになることを福島に戻る条件に挙げる。一方で、復興を後押しすることも同アカデミーの使命。「風評被害はすぐに消えないと思うが、福島で子供たちが普通にボールを蹴る姿を見れば、サッカーを愛する人から徐々に解消していくのでは」。静岡との絆が、被災地の未来を開くと信じている。

(社会部・寺田拓馬が担当しました)

## 再開目指すJヴィレッジ

福島と静岡 ▶下

## 復興への歩み

東日本大震災 6年

△メモ▽JヴィレッジとJFAアカデミー福島 Jヴィレッジはサッカー白熱ワールドカップを見据えたナショナルトレーニングセンターとして東電が1997年に建設し、福島県に寄贈した施設で、5千人収容のスタジアムと天然芝・人工芝のピッチ計12・5面、宿泊施設を完備していた。震災前は少年少女の全国大会から日本代表チームの合宿まで幅広い利用があり、年間50万人が来場した。2018年夏の一部再開、19年4月の全面再開を目指し、復旧工事が進む。JFAアカデミー福島は震災前 Jヴィレッジに隣接して男女それぞれ寮があった。現在も全国から集まった中学生と高校生計約120人が所属し、男子は御殿場市、女子は裾野市を拠点に活動している。



サッカーを通じて深めた静岡との絆の大切さを選手に伝えるJFAアカデミー福島の中田康人男子チーフコーチ＝2月22日、御殿場市

➤ JFAアカデミー福島女子 サポートファミリー富岡会

クリックで移動 ⇒ <http://tomioka2.web.fc2.com>